

第2部：現行リスクアセスメント手法の問題点解消のための考え方

2. どうすればリスク評価のバラツキを少なくできるのか

(4) 曝露の頻度（時間）

- ・「第1部：現行リスクアセスメントの問題点」で述べたように、曝露の頻度（時間）は安全方策の種類（レベル）によって被災の確率に影響する度合いが異なります（「独立変数（因子）」ではなく、安全方策の種類（レベル）の従属変数）
- ・安全方策の従属変数であり独立した評価ファクターとはなり得ない曝露の頻度（時間）はリスク評価のファクター（評価要素）とすべきでない、というのが私の考えです。
注）国際安全規格のように、安全方策実施前の状態でリスク評価を行い、リスク評価結果に見合った安全方策を選択する場合（安全方策実施後のリスクを評価しない場合）は曝露の頻度（時間）は「独立変数（因子）」となります。このことと混同しないようにしてください。
- ・とはいえ、設備的な安全方策を採用することが不可能で、標識・アラームの設置あるいは作業標準書の教育・訓練といった「管理体制」しか採用できない作業現場もあります。このような職場におけるリスク評価（OHSMSでのリスクアセスメント）においては、曝露の頻度（時間）を「独立変数（因子）」として使用することになります。
- ・この場合においては評価のバラツキを少なくするため、曝露の頻度（時間）の区分は通常1日、一ヶ月、一年といった値が設定されています。